

青ヶ島東四十四町程 南北壹里程 江月より海上 二百三十里程

一家數四十六軒 人數男百三十四人 女百廿七人 牛三十一疋

ごうき明神 一社 神主兵庫 寺一ヶ所 豆州下田海善寺末 淨土宗清受寺

一御年貢紬三十壹疋 毎年定納仕候

一御圍米無之 急難之節は 八丈島御圍米貸し渡申候

一此島田方無之 畑計有之 粟 稗 芋 あした草 太根 蕪 作り 夫食に仕候

一此島稼には 畑作之間は 漁事仕 海上之稼をいたし 女は 蠶飼 糸綿 八丈島へ渡し 御年貢物糸綿

等積入 渡海仕候

一漁船三艘御座候

一流人渡世之儀は 親類より見繼無之者は 百姓手傳致し申候○中略

寶曆三年西十二月

〔北條五代記五〕八丈島へ渡海の事

聞しは今愚老○三浦淨心 伊豆の國下田と云在所へ行たりけるに 里人語しは 是より南海はるかに

へだて八丈島あり 此島は日本の地よりも唐國へ近く覺えたり されいかにと云に 雲しつかな

る時分 此島より見れば 唐島に當り定て雲たなびく山あり 是から國より別に有べからず 然共

此島をもるこしにては いまだしらす 北條早雲の時代 關東より此島を見出し 伊豆の國の内に

入たり 北條氏直公時代までは 三年に一度 伊豆の國下田より渡海あるに 大船に水手をすぐり

取のせて 秋北風に 此島へわたる年貢には 上々の絹を納るとくは しく語る所に 村田久兵衛と

云者いひけるは 我先年八丈島へわたりしが 今にをいて 此島なつかしく 夢まぼろしに立そひ

忘れがたし○中略 我主板部岡江雪入道 元來いつの下田の郷の眞言坊主也 能筆ゆへ氏直公へめ